

「相中相高百年史」より
(戦時体制下の相馬中学校 8)

8 学徒動員：五年生（相中第 43 期生）・・・ペンをハンマーに

(1) 高橋敏夫^(※1)の体験記録

① 福島日東礦工業（現・日東紡績）へ出動

我々 43 期の五年生に対して出動命令が下ったのは太平洋戦争の敗色が濃くなってきた 1944（昭和 19）年 7 月初旬であった。福島はうだるような暑さであった。涼風吹きわたる太平洋沿岸で生活してきた我々が初めて踏んだ福島盆地はまるで炎熱地獄のようであった……。生徒 154 名の引率は地理の山本先生、公民の立谷先生、化学の阿部先生であった。……我々は 12 班に編成され、鑄鋼、鑄物、電気、機工、岩綿の各部に配属され、到着翌日から各職場で作業に入った。……

作業中の顔前には 80W の裸電球が吊されていた。真夏、その電熱は風通しの悪い職場内の気温をさらに高め、恐らく室内温度は 30 数度にのぼっていたものと思われる。顔からは汗がしたり、ゲートルを巻いた脛に汗水が溜まるほどであり、猛暑と空腹でフラフラになって思わず旋盤にしがみつ়くこともあった。……

鑄物部に配属された佐藤庄次郎^(※2)も記憶の糸をたぐりながら次のように語った。

「鑄物の砂成型造りや鑄造準備などの作業を工員の技術指導によって行ったが、何とかこなした。真夏の仕事は汗ダクでつらかったがお国のため…と思い頑張った。しばらくすると作業に余裕ができたためか、日に数度、業務連絡にくる福女生に目を輝かせ、手を休めることもあった。

その後、機工部に配転になり、旋盤、フライス盤などの機械操作を習得し、バルブの仕上げに必死になって取り組んだが、なかなか完全な製品をつくることができず、しばらくの間、約 30% のオシヤカを出してしまったと思う。猛暑と堪え難いほどの空腹に耐えて一日中、殆んど立ち通しの仕事はきつかった…。鑄鋼部の所属だった橋本行正^(※3)も、苦難の昔日を偲ぶ。

「バルブの鑄造に従事した。3 トンの電気炉で 2 千度を越す高温で溶解した鋼湯をズラリと並べられた鑄型に次々と流し込む作業だった。灼熱の鋼湯を扱う危険な仕事だから間違って体にかかったら瞬時にして大火傷だ。汗は背中や腹を流れ、緊張の連続の過酷な仕事であった。この青春時代の異常な経験は後々、何事にも耐えられるたくましい根性を養ってくれたものと思う。親切に指導に当たってくれた職長さんとは終戦後も約 20 年にわたり年賀状の挨拶を交わした…」

真冬の作業もまたつらかった。福島盆地の冷え込みは厳しく、気温が零下 10 度前後にさがる日もあった。職場内に暖房もなく、かじかむ手を息や裸電球で温め、体をふるわせながらの作業であった。真夏は同情したが、熱風漂う電気炉周辺で作業する人々を羨ましく思った。

厳冬の一月某日、私は左足指先にバルブを落とし、生爪を剥ぐ怪我をした。鮮血が噴き出し、診療所で治療を受けたが、なかなか治らなかった。左足は、靴も地下足袋もはけず、素足に草履ばきであった。化膿し、降雪の日など戸外に出ると冷水が沁み、ズキズキ痛む足を引きずって物を運んだりした。その後、怪我した爪先には変形した爪が生えたが、のびず、今でも切る必要がない。

その頃であったろうか、同班の森重政^(※4)も左手親指先を旋盤の歯車にはさまれて切断、しばらくの間、鮮血をにじませた包帯を解けなかったが、一日も休まず、右手一本で仕事を続けた。……

(※1) 大甕出身 (※2) 中村出身 (※3) 飯豊出身 (※4) 飯豊出身